

防災教育の一方法・受験指導と防災教育～日本史の例

順天中学校・高等学校講師

日本防災士会防災士

浅野哲彦

1. 始めに

平成23年東北地方太平洋沖地震、いわゆる東日本大震災以後、防災教育の重要性が再認識されるようになった。学校教育においても通常の避難訓練以上のものを行う事例が多くなったように思われる。

しかし、小学校・中学校ではHUG（避難所運営ゲーム）を取り入れたり地域の防災マップを作ったりと、それぞれに工夫した防災教育を行っているところが多いように見受けられるが、高等学校では必ずしもそうではないと思われる。特に私学にはお約束の避難訓練以上のことをしているところはかなり限られるであろう。

教育委員会の指導力が比較的強い公立高校と違い、私学の場合は学校の考え方一つで方針が決まってしまうところがあるため、学校間でかなりの温度差があり、また、どちらかと言えば熱心でない学校の方が多いのが実情だろう。

私学の高等学校の立場としては、やはり大学進学のための受験指導に多くの時間を割きたいのが本音である。特に私が勤務する学校は単なる学校法人の経営で、大学付属でもなければ宗教組織の支援が受けられる学校でもない。学力レベルから言っても中の上というところがせいぜいの、典型的な「普通の高校」である。そのような学校が少子化の中、生徒を集めるために一番効果的な策は、やはり難関大学への進学率を高めることである。特に最近は塾に高校（中学）が生徒募集のための営業に行くのが普通である。塾の先生は、まず大学進学率、それも難関大学への進学率に注目するため、学校側としても進学実績を強調しなければ、塾の方から生徒に進学を勧めてもらえない。人間教育の重視や国際的に活躍できる人材を育てるなどと建学の精神を強調しても、共感してもらえないことは少ないだろう。

進学実績を上げるためには、正規の授業を充実させることは言うまでもないのだが、放課後に補講を組んだり、春夏冬の長期休業時に進学講座を開いたり、あの手この手で進学指導のための時間を作ろうとする。毎月の土曜日は予備校の模試にあてるか総合的学習の時間にあてる。おそらく防災教育の無意味を主張する学校はない。しかし「やりたくてもできない」というのが実情だろう。

そこで、通常の授業の中で防災教育ができないか、ということを考えてみる。実のところ、防災教育を広くとらえればそれに関わる科目はいくつもあるのだが、普通真っ先に想起される科目は地学である。ところが、私学では地学を正規の科目に入れていないところが多い。カリキュラム上は地学とあっても実際に教えている科目は生物など違う科目であったりするところもある（ただし1学期分の授業のみ地学の授業を実施してアリの作りをしておくことが多い）。これでは、地学の授業の中で防災教育を、というのはとても無理である。

では、地理ではどうか。地学に比べれば地理の時間を取っている学校は多いが、それとて必修とは限らない。昨今は早い段階から文理系の進路を分けた進学指導をするので、文系を選択すると地歴科は日本史や世界史を取り、地理は取らない（地学は当然取らない）という生徒が非常に多い。

となると、地学でも地理でもない科目の中で防災教育を、ということになる。ところが、避難所の運営や家庭内でできる災害対策、あるいは負傷者の応急処置などは家庭科や保健体育科の範囲の中でできるであろうが、災害のメカニズムや災害史、災害の実例といったことについては無理だ、と考えがちである。だから、普通はやらない。そこに受験指導が加味されると、そんなことは入試には出ないからやらない、となる。元々地学的教養がない教員ならば、そもそも自分の担当教科の中で防災教育をやろうという発想すらないだろう。

しかし、できるのである。確かに地学的教養や防災教育に疎い教員には厳しいかもしれないが、そこは教材研究を入念に行ってカバーしてもらいより他はない。ここで提案したいのは、そういうことではなく、教育基本法の表現を借りれば、教育は「あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ」なければならないのだから、入試がどうか、うちの科目で

はどうとか言わず、各々の教員が積極的に授業の中に防災教育の要素を取り入れることが重要ではないか、と考えるのである。

前置きが長くなったが、ここで紹介するのは、私が長年受験日本史の指導をしてきた中で授業の余談的に話していた地学や災害史に関わる知識を、最初から講義内容に織り込めば、防災教育としての意義も持たせられるのではないかと思いついてから作った、受験日本史の指導のためのテキストである「テーマ別日本史」の「自然災害に関する問題」から抜粋したものである。

東日本大震災以降、地震災害を題材にした日本史の大学入試問題が散見されるようになった。また、浅間山の天明3年噴火が天明の大飢饉を深刻化させ、松平定信の寛政改革につながったということは、地学に疎い日本史教員でも普通に教えていることである。そのような、災害に関する問題を集めて、災害史の学習や防災教育を受験指導と同時に行ってみよう、というのがこのテキストのコンセプトである。

受験日本史という、防災教育とまったく関係なさそうな教科教育でも、やり方一つでできるのだ、ということを証明して見せたい、というのが本旨である。

それでは、実際のところどのような問題が大学入試において出題されているかを見てみたい。

以下の各例は、実際に出題された問題を中心に、一部は自作問題を加えて作成した、テーマ別日本史としてのオリジナルテキストの一部である。

ここで紹介したいのは問題文であるから、設問に関しては特に論じないが、日本史の教員として批評すると、たいいてい問題は日本史の入試問題として妥当な出題であるといえる。

2. 「例題と解説」の例

以下は、実際に出題された大学入試問題に、独自の解説を付けてみたものである。多少地学に造詣が深い、とは言ってもしょせんは日本史の教員、専門の方々から見れば、不十分は記述も多々あるだろう。

しかし、これだけ地学的な解説をしてある日本史の参考書はないと言い切れる、と自画自賛を許していただきたい。これを手がかりに、地学、災害史や防災教育の要素を含んだ講義を展開すれば、受験日本史の指導の中での防災教育という目的も達せられると考えている。もちろん、授業展開にあたっては、可能であれば写真や映像を用いることも考えていい。

1 次の文を読み、下記の設問A・Bに答えよ。

現在の日本は東日本大震災の復興過程にあるが、これまでも日本はたびたび大きな地震に見舞われてきた。しかし、その都度それを乗り越え、復興を成し遂げてきた。そうした歴史を振り返ってみよう。

文献で確認できるわが国最古の地震は、1) 允恭天皇の時代に河内で生じた地震とされ、『日本書紀』で確認できる。その後、2) 天武天皇の治世に発生した天武13年地震では、3) 土佐で多くの田畑が水没し、海岸では多数の船舶が行方不明になったとされる。また、『続日本紀』にも 4) 8世紀前半に起きた地震について記録が残されている。5) 745年の天平17年地震では、仏寺堂塔など多数の建物が崩壊し、地割れや湧水の記載から 6) 平城京周辺でも液化化現象が生じたと推測される。六国史の最後にあたる 7) 『日本三代実録』にも 8) 貞観11年の地震津波の被害について記載がある。この救済のため朝廷は、検陸奥国地震使を派遣し人心の宥和や被災者の救済につとめると共に税の減免を命じた。当時の朝廷が、善政を行うことで地震の発生を抑えようとしたと考えられている。

9) 『百鍊抄』によれば、平家が壇の浦で滅亡した1185年に10) 文治元年地震が近畿地方を襲い、寺社が倒壊し多くの民家にも被害が生じた。この地震の様子は鴨長明の随筆『(イ)』にも記されている。鎌倉時代には、11) 1239年に相模トラフから発生したプレート境界の巨大地震が鎌倉を襲う。この地震では(ロ)宗の建長寺が倒壊炎上するなど大きな被害が生じた。

室町時代には南海トラフ沿いの巨大地震であった12 康安元年地震が起こったことが13) 『太平記』に記されている。さらに(ハ)の政変で擁立された11代将軍足利義澄の時代に

(ハ)の地震が起こり、東海地方を中心に大きな被害がもたらされた。この地震で内陸の淡水湖であった浜名湖が海につながったとされる。14) 豊臣秀吉による天下統一の途上にあたる天正年間の地震では、畿内、東海、東山、北陸など広範囲で被害が生じた。この地震の様子は、ポルトガル出身のイエズス会の宣教師 15) ルイス=フロイスによっても記されている。これに引き続いて慶長元年地震が畿内を襲い、16) 伏見城天守が崩落した。こうした地震被害にもかかわらず豊臣政権は朝鮮出兵や城郭再建を優先し、寺社や町屋の復興は遅れた。むしろ、それぞれの町屋の復興は 17) 京都の町衆や堺の会合衆など自治的組織により進められたと推測される。

江戸時代にも、マグニチュード7.0以上の巨大地震がたびたび発生したと考えられている。5代将軍徳川綱吉の時代に関東地方を襲った元禄16年地震の様子は、(ニ)の自伝『折たく柴の記』にも記されている。幕末の1854年には安政東海地震と安政南海地震が立て続けに起こった。安政東海地震は条約交渉のため下田に来航していたロシア艦ディアナ号を大破、沈没させる。幕府は 18) 江川太郎左衛門に新艦建造を行わせ、乗組員を帰還させることとなる。さらに翌1855年にも地震が江戸を襲った。この地震では、徳川斉昭の側用人で『弘道館記述義』を著し藩校設立に尽力するなど藩政改革にあたった(ホ)が犠牲となった。この安政江戸地震では、江戸町奉行を中心に被災者救済のための食事支給や授産事業などを行う御救小屋が建造され、復興のために職人が集められた。また、寛政年間に設置された(ヘ)が管理運用する七分積金や備蓄された囲米を用いた被災者の救援も行われた。

このように近世になると幕藩制組織を通じて組織的な救済が行われ、復興の足掛かりが形成された。日本における科学的な地震研究は、1876年に来日し工部大学校で地質学教授となったイギリス人地震学者(ト)等が、1880年に世界初の地震学会である日本地震学会を創設したことにより、本格的に開始される。しかし、それ以降も日本は何度も大きな地震に見舞われてきた。天災を防ぐこと自体は難しいが、その被害を減少させるために地震学を発展させ、災害の歴史から学ぶことも大切である。

A. 文中の空所(イ)～(ト)それぞれにあてはまる適当な語句を記せ。

B. 文中の下線部1)～18)にそれぞれ対応する次の問1～18に答えよ。

- この人物に関する記述として正しいのはどれか。次のa～dから1つ選び、その記号を答えよ。
 - 欽明天皇の皇女で最初の女性天皇であった。
 - 宋の順帝に上表文を奉じ安東大將軍倭王に補任された。
 - 中国の南朝に朝貢した倭の五王のうちの済と考えられている。
 - 渡来系氏族の血を引く高野新笠が母であった。
- この時代の出来事はどれか。次のa～dから1つ選び、その記号を答えよ。
 - 大野城が築城された。
 - 庚午年籍が作成された。
 - 白村江の戦いが起こった。
 - 八色の姓が制定された。
- 土佐国府から都までの紀行文で、国風文化のひとつとされる『土佐日記』の作者は誰か。その名を記せ。
- この時代の出来事について、もっとも古いものから年代順に並んでいる組み合わせはどれか。次のa～dから1つ選び、その記号を答えよ。
 - 国分寺建立の詔 → 墾田永年私財法の発布 → 長屋王の変 → 藤原広嗣の乱
 - 墾田永年私財法の発布 → 藤原広嗣の乱 → 長屋王の変 → 国分寺建立の詔
 - 長屋王の変 → 藤原広嗣の乱 → 国分寺建立の詔 → 墾田永年私財法の発布
 - 藤原広嗣の乱 → 国分寺建立の詔 → 墾田永年私財法の発布 → 長屋王の変
- この時の天皇は誰か。その名をしるせ。
- これに関する記述として正しいのはどれか。次のa～dから1つ選び、その記号を答えよ。
 - 元明天皇により唐の長安にならい建設された。

- b. 持統天皇により大和三山に囲まれた地に遷都された。
- c. 壬申の乱に勝利した大海人皇子により遷都された。
- d. 和気清麻呂の献言で桓武天皇により遷都された。

7. これに記された三代の天皇の組み合わせとして正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。

- a. 宇多天皇・順徳天皇・嵯峨天皇
- b. 宇多天皇・陽成天皇・嵯峨天皇
- c. 清和天皇・光孝天皇・順徳天皇
- d. 清和天皇・陽成天皇・光孝天皇

8. これにより倉庫や城壁が崩落したとされる多賀城に関する記述として正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。

- a. 坂上田村麻呂が築き、鎮守府が置かれた。
- b. 733 年に出羽の柵を北進させて設置され、政庁的な性格を有した。
- c. 759 年に北上川主流をおさえた蝦夷勢力圏に築かれた。
- d. 陸奥国の国府と鎮守府が置かれた。

9. これに関する記述として正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。

- a. 公家の没落と武士の台頭を、道理の理念と仏教思想に基づき記す
- b. 源平合戦を軸に平家一門の興隆と滅亡を、仏教的な無常観を背景に記す。
- c. 源頼政の挙兵から宗尊親王の帰京までの諸事件を、日記形式で記す。
- d. 冷泉天皇から亀山天皇即位までの公家社会の動静を中心に記す。

10. これにより倒壊・破損した蓮華王院に関する記述として正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。

- a. 光明皇后が創建し、妙法蓮華經を配置する全国の国分尼寺の中心であった。
- b. 後白河法皇が平清盛に造営させた天台宗の寺院である。
- c. 天武天皇が皇后の病氣平癒を祈願して創建した藤原京四大寺の 1 つである。
- d. 7 世紀に創建され、柱のエンタシスなど南北朝様式を特徴とする。

11. この混乱のさなか、御内人であった平頼綱を討滅した執権は誰か。その名をしるせ。

12. これにより金堂が倒壊した四天王寺の堂塔配置の特徴として正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。

- a. 金堂の前に塔を建て南北一直線にした配置。
- b. 中央に金堂を配し、南に東西両塔が立つ配置。
- c. 東西両塔が中門の外に出て配される配置。
- d. 西の塔と東の金堂が中門から見て左右対象と配置。

13. これに対し伊勢神道の理論を背景に南朝の立場から皇位継承の道理を説いた歴史書は何か。その名を記せ。

14. これに関する出来事について、もっとも古いものから年代順に並んでいる組み合わせはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。

- a. 小牧・長久手の戦い → 賤ヶ岳の戦い → 小田原征伐 → 九州平定
- b. 小牧・長久手の戦い → 賤ヶ岳の戦い → 九州平定 → 小田原征伐
- c. 賤ヶ岳の戦い → 小牧・長久手の戦い → 小田原征伐 → 九州平定
- d. 賤ヶ岳の戦い → 小牧・長久手の戦い → 九州平定 → 小田原征伐

15. この人物に関する記述として正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。

- a. 1549 年、鹿児島に到着し、大内義隆らの大名の保護を受けてキリスト教を布教した。
- b. 大友宗麟ら九州のキリシタン大名に勧めて少年使節をローマに派遣した。
- c. 織田信長の信任を受け、京都に南蛮寺を、安土にセミナリオを建設した。
- d. 京都で織田信長に謁見し、その保護の下でキリスト教の布教につとめ、後に『日本史』を執筆した。

16. これに関する記述として正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。
- 豊臣秀次により築造され、五層七重の天守を誇った。
 - 豊臣秀次により築造され、大天主を中心とする連立式天守閣を有した。
 - 豊臣秀吉によって築造され、都久夫須麻神社本殿はその遺構とされている。
 - 豊臣秀吉によって築造され、大徳寺唐門はその遺構とされている。
17. これに関する記述として正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。
- 自治組織防衛のための武士や猿楽など芸能者も含まれ、独特な町衆文化が育った。
 - 自治的町政を月交代で担当する門閥豪商で、三十六人衆とも呼ばれた。
 - 生活共同体の防衛の役割を持った自営の商工業者を中心に構成された。
 - 町奉行の下で町触伝達など町政運営に関する行政事務を担当した。
18. この人物に関する記述として正しいのはどれか。次の a ～ d から 1 つ選び、その記号を答えよ。
- 伊豆韮山の代官で高島秋帆から砲術を学び、反射炉を築造した。
 - オランダ人から砲術を学び、幕府に招かれ講武所砲術師範となった。
 - 鉄砲方として西洋砲術を学び、慶応年間の軍制改革に参画した。
 - 反射炉を築造して大砲製作所を設立し、アームストロング砲の鑄造などを行った。

’14 立教 コミュニティ福祉・観光・経営・経済・現代心理・
社会・文・法・異文化コミュニケーション

問題のねらい 過去の大地震を振り返りながら、それぞれの時代に関する問題が設定されている。設問自体は必ずしも基本的な問題ばかりではないので、できるものは確実に答えたい。

解 答

- | | | | | | |
|-------|---------|-----|------|-----|-------|
| A. イ | 方丈記 | ロ | 臨濟 | ハ | 明応 |
| ニ | 新井白石 | ホ | 藤田東湖 | ヘ | 江戸町会所 |
| ト | ジョン＝ミルン | | | | |
| B. 1. | c | 2. | d | 3. | 紀貫之 |
| 5. | 聖武天皇 | 6. | a | 7. | d |
| 9. | d | 10. | b | 11. | 北条貞時 |
| 13. | 神皇正統記 | 14. | d | 15. | d |
| 17. | c | 18. | a | 16. | c |

解 説

「平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震」、いわゆる「東日本大震災」が発生して以来、改めて震災に対する国民の関心が高まった。テレビ、ラジオ、新聞、雑誌など、マスメディアではそれぞれの特長を生かした形での震災特集がしばしば生まれ、また、被災地や震災復興の検証企画も見られる。政府や自治体による災害対応の訓練も形ばかりではなく、各機関や地域の連携を具体的に想定した訓練が行われることが多くなったように見受けられる。

昭和末期から東海地震の発生の可能性とそれに対する対応策が検討され、啓蒙もされていたが、それは主に被災地として想定される静岡県を中心とした地域のみに関心事であり、他の地域にとっては他人事であった。

それが「平成 7 年(1995 年)兵庫県南部地震」いわゆる「阪神淡路大震災」以降、気象庁によって特別に名称が付けられた地震だけでも、平成 12 年(2000 年)鳥取県西部地震、平成 13 年(2001 年)芸予地震、平成 15 年(2003 年)十勝沖地震、平成 16 年(2004 年)新潟県中越地震、平成 19 年(2007 年)能登半島地震、平成 19 年(2007 年)新潟県中越沖地震、平成 20 年(2008 年)岩手・宮城内陸地震の 7 件が発生している。こうなると、地震大国日本として、どこで大きな地震が起きてもおかしくないという考え方に変わってきた。

そして現在では東海地震、首都直下型地震の他に、南海地震、東南海地震の可能性が特に懸念されている。このうち、首都直下型地震を除いた 3 つの地震は「地震三兄弟」とも呼ばれるほどで、連動して起きることが知られている。1605

年の慶長地震や 1707 年の宝永地震では東海～南海にかけてほぼ同時に地震が起こったと見られ、1854 年の安政南海地震は安政東海地震の 32 時間後に、1946 年の昭和南海地震は昭和東南海地震の 2 年後に発生した。

ここで地震が発生するメカニズムについて大まかに述べてみよう。地球の表面は「プレート」と呼ばれる大きな岩盤に覆われており、それらが互いにゆっくり動いている。プレートの境界では、プレート同士がぶつかったりまたは引きずられたりして変形し、岩盤に歪みがたまる。やがて耐えきれなくなった岩盤が破壊される。これが大地震の原因で、世界中で起こる地震のほとんどはプレートの境界付近で発生している。日本列島はちょうど 4 枚のプレートの境界に位置していて、世界でも有数の地震多発地帯になっている。

現在、防災上関心を集めている南海地震・東南海地震は、南海トラフ(水深約 4000m になる巨大な海底の溝)が震源となる。南海トラフは駿河湾南方から四国沖にかけて、海側の「フィリピン海プレート」がその北にある陸側の「ユーラシアプレート」の下に潜りこむ境界にあたる。

そして南海トラフ沿いで発生する巨大地震のうち、四国沖から紀伊半島沖で発生するものを南海地震、紀伊半島以東で発生するものを東南海地震、それより東の駿河トラフ沿いで発生するものを東海地震と呼ぶ(東南海と東海地震を合わせて東海地震と呼ぶ場合もある)。

なお、内陸地震の多くや、近年注目されている首都直下型地震は、活断層が動くことによって起きるため、上述したプレート型地震とはまた別のものである。

ここまで地震について言及したが、海底を震源とした場合に起きる地震に伴う津波(日本近海底が震源の地震でなくとも巨大津波に襲われた事例はある)、火山の噴火、台風や局地的豪雨などによる水害及び土砂崩れなど、日本にはいくつもの自然災害が起こりえるし、事実、過去にそのような自然災害による被害、惨事は数えられないくらいある。例えば地名の由来には、かつての水害や土砂災害の記憶が込められて付けられたものは多い。しかし、聞こえのよい地名・町名に変えられ、その結果、かつてそこで大規模な災害が発生し多くの命が犠牲になったことが忘れ去られ、再び大惨事を招くということはしばしばある。

最近の大学入試問題では、自然災害、特に地震を取り上げて、日本史の問題を設定するものが見られるようになった。この傾向は出題者の力量が問われるために、どこでも、というわけにはいかないだろうが、今後多くなっていくと思われる。教科書の本文に述べられていることを学ぶのが日本史学習の本線であるが、その裏にある様々なことがらを同時に汲み取らねば、本当の歴史の学習はできない。日本史を学びながら、同時に災害についての知識を学ぶことは、将来に役立つ知識を学ぶ上で重要であり、それこそが实际生活に役立つ知識である。そこからさらに、防災意識を高め、非常時に対応できるようにしてほしい。

教科書の太字を覚えることが歴史学習ではない。

2 次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

日本の江戸時代にはめざましい生産力の発展があり、人口は増加し、生活も豊かになった。その一方で、大きな地震や災害が列島上を襲った。宝永の富士山の大噴火や、安政の大地震もその一つである。それ以外にも、大きな飢饉に 4 度も見舞われ、人々の生活を苦しめた。その 4 つの飢饉は当時の年号を付けて呼ばれている。それらの大飢饉は、それぞれ幕府の政治に大きな影響を与えた。以下の〔A〕～〔D〕はそれぞれの飢饉について述べたものである。

- 〔A〕 将軍吉宗が政権を担当していたとき、イナゴやウンカの大量発生によって、西日本を中心に作物が大きな被害を受けた。この結果、米価が高騰し、江戸では困窮した都市民が米問屋を襲うなど、打ちこわしが起こった。
- 〔B〕 冷夏などの天候不順に加えて、浅間山の大噴火の影響が長期間におよび、東北地方を中心に多数の餓餓人が出たり、関東の農村が荒廃した。全国的にも一揆や打ちこわしが頻発し、幕府の支配体制が動揺した。
- 〔C〕 この飢饉の結果、幕府は百姓の経営が安定するような方向へ政策を変える一方、百姓の生活に事細かく介入する法令を出した。現在はその存在が疑われている「慶安の触書」の基になるような法令が相次いで出された。幕府農政の基本が確立し、田畑永代売買の禁令や田畑勝手作りの禁等が出されたのはこの頃である。

〔D〕 この時期の長期にわたる飢饉の結果、物価が騰貴し、全国的に一揆や打ちこわしがピークに達した。特に大阪では富裕な商人が米を買い占めて暴利を得ていたとされ、政治の無策に対して町奉行所の元与力大塩平八郎が貧民救済のため蜂起したことが、幕府や当時の人々に大きな衝撃を与えた。

【 設 問 】

問 1 〔A〕～〔D〕を時代順に並べなさい。

解答はたとえばA→B→C→Dのように記しなさい。

問 2 〔B〕と〔D〕をうけて、幕政改革を主張した政治家が登場した。〔B〕については、その人名を挙げ、その人物がどのような対応策をとったのかを簡潔に述べなさい。また〔D〕についても、その人名を挙げ、その人物がどのような物価安定を目指す政策を実施したのかを簡潔に述べなさい。

問 3 江戸時代にかぎらず、あなたが知っている日本列島上に起こったさまざまな自然災害について、それが人々の生活や社会に与えた影響について、論じなさい。

’13 千葉 文系 前期

問題のねらい 江戸時代の代表的な飢饉に関する問題であるが、設問自体は要するに江戸時代の基本的な政策に関するものである。特筆すべきは問 3 で、設問としては非常にユニークであるといえる。

解 答

問 1 C→A→B→D

問 2 B 松平定信

東日本、特に東北地方の農村の荒廃により、多くの農民が江戸に流入したため、それらを農村に帰すために旧里帰農令を発する一方、江戸に留まった無宿人対策として石川島に人足寄場を設置し、授産事業を行った。また飢饉対策として、諸大名に対しては石高 1 万石につき粃 50 石を蓄えさせる困米を実施させ、江戸では町入用を節約させてその節約分の 7 割を非常時のために積み立てさせる七分積金を行わせた。

D 水野忠邦

一般の商人の自由な取引を許すことで、商人相互の自由競争によって物価が下がることを期待し、大坂二十四組問屋・江戸十組問屋を解散させて、独占営業を排除した。これにより物価の引下げを企図するとともに、在郷商人を統制することによる商工業の統制を図ろうとした。

問 3

1923 年、相模湾を震源とする関東大震災が発生した。被災地は静岡県から茨城県に至る沿岸部を中心とした地域で首都機能は一時喪失し、京浜工業地帯は壊滅的な打撃を受けた。政府は戒厳令を発令して治安維持に努める一方、全国各地や海外からの支援を得て被災者救援を行った。しかしその混乱に紛れて自警団による朝鮮人虐殺や甘粕事件、亀戸事件など無政府主義者、労働運動家の虐殺が起きた。政府は帝都復興院を設立して後藤新平内務大臣を総裁に任命し、復興事業を進めたが、経済的状況や政党の対立によって中断する事業もあった。また被災によって決済困難に陥ったいわゆる震災手形が原因となって震災恐慌が起こり、政府は震災手形割引損失補償令を出して事態の收拾を図ったが、これに乗じて戦後恐慌以来の不良債権を処理しようという企業もあり、昭和初期の金融恐慌へとつながっていった。

解 説

江戸の三大飢饉と言え、寛永の大飢饉・天明の大飢饉・天保の大飢饉である。そして、飢饉の原因はまず間違いなく天候不順である。暑すぎて虫害、病気や水不足で稲の生育に異常があったり、寒すぎて冷害にやられたり、日照不足で稲の生育に異常があったり、どちらにせよ、稲の生長が順調にいかず、結果不作となると、飢饉が発生する。これは自然災害が社会に与えた影響という考察には最もわかりやすい事例であろう。

寛永の大飢饉は1642(寛永19)年に、西日本を中心として発生した病気による牛の大量死が契機となり、翌年にかけて全国で凶作と飢饉が発生したものである。大規模な飢饉となった原因は、干害、洪水、冷害と地域によって異なる。全国で約5～10万人が餓死したといわれる。また、この前後に当たる1619(元和5)年、1675(延宝3)年、1680(延宝8)年にも飢饉が起きていて、近世前期の四大飢饉とも言われている。

天明の大飢饉は、この頃世界的に見られた地球の寒冷化(小氷期)が原因である。1783(天明3)年の大凶作のために、翌年にかけて深刻な飢饉が起り、また86年の凶作でその翌年も飢饉となった。この期間は冷害型の気候、海流異変が続き、特に関東・東北は著しい被害を受けた。83年は寒冷な北東風(やませ)により稲が実らず、全体的に4分作以下で、山間部などでは収穫皆無となった所も少なくなかった。このため米価は騰貴し、また自領の防衛のために行われる津留によって食糧の欠乏する地帯の飢饉は倍加され、海草・草木の芽や雑草・松の甘皮など、

食糧になりうるものはすべて取り尽くされたという。特に1783年～85年の奥羽大飢饉では、津軽藩内のみで餓死・疫病死13万余、農民逃亡2万、空家・絶家35000余の犠牲を出した。

この天明の大飢饉に追い打ちをかけたのが、1783(天明3)年の浅間山の噴火である。この時発生した鎌原火砕流と天明泥流により、浅間山北麓から利根川流域を中心とする関東平野各地は甚大な被害を受けた。被害の詳細は諸記録から、死者1624人、流失家屋1151戸、焼失家屋51戸、倒壊家屋130戸余りであることが判明している。

この時の噴火の概要は次の通りである。4月9日(太陽暦では5月9日)に最初の噴火が起り、6月下旬から噴火の頻度が増した。6月29日から本格的な噴火が始まり、7月5日まで断続的に活動が続いた。7月5日(8月2日)からは激しい噴火と火砕流が繰り返し発生するようになり、7月7日(8月4日)夜からの夜に入って噴火強度は急激に上昇した。

7月8日午前10時に山頂火口で大爆発が起り、多量の岩塊が噴き上げられ、岩塊は北側斜面に雪崩のように落下し、火砕流となって流下した(鎌原火砕流)。吾妻川に流入したものは泥流となって江戸まで流れ下り、成層圏まで上昇した噴煙は偏西風で流され、風下では軽石や火山灰が激しく降った。一方、山腹では火砕流や溶岩が流下した。現在、観光地として知られる「鬼押出し」はこの時に形成された。

7月8日に噴出した火砕流は高速で北流して鎌原村を襲い、死者477人(死亡率83.7%)、生存者93人、93軒の家屋は残らず倒壊、馬は200頭のうち170頭死亡、荒廃地は村の耕地の95%以上に及ぶという甚大な被害を受けた。

天保の大飢饉は、1831(天保2)年の出羽大洪水・関東大風雨・奥州飢饉に始まり、1836年まで気候不順のために全国的な飢饉となったものである。ちなみに1836(天保7)年の全国平均作柄は3～4分作だった。

さて、問3は興味深い出題である。受験生の教養が試されていると言っても過言ではない。設問の趣旨から言って地学的な知識はないよりまし、といった程度だが、そもそも災害に関する知識がなければ答案が書けない。

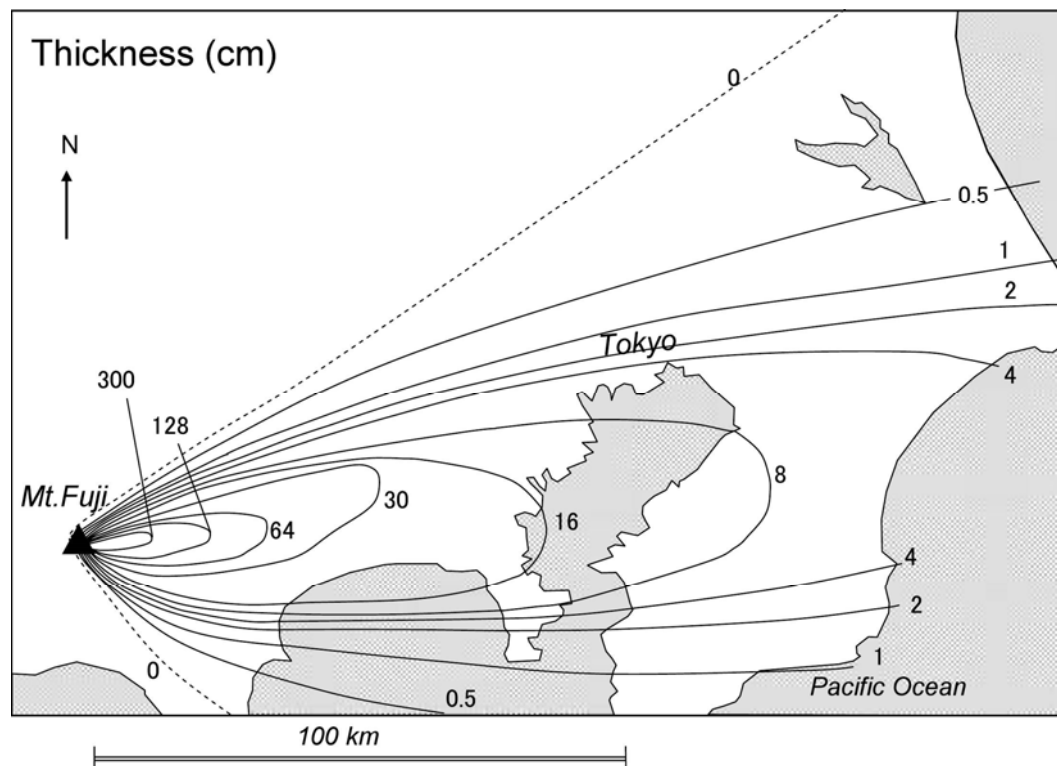
一般に想起される歴史上の有名な災害の事例としては、(1)関東大震災、(2)天明の大飢饉と浅間山の噴火、(3)富士山宝永4年噴火、といったところだろう。このうち(2)は問題に採り上げられているので、答案には不適切である。養和の飢饉、安政の大地震、昭和南海地震、伊勢湾台風辺りでも書けるだろうが、教科書程度の知識では答案にならないのも事実である。

近年、噴火の可能性が取りざたされている富士山であるが、最も最近の噴火は1707(宝永4)年であった。その時の概況と、その後の復興について簡単に述べておこう。

1707(宝永4)年11月23日(太陽暦では12月16日)午前10時頃、南東斜面(六合目付近)から大噴火が起る。噴火は12月9日未明まで断続的に続き、新たに開いた宝永火口(宝永山)から噴出した火山礫や火山灰などの噴出物は、偏西風に乗って現在の静岡県北東部から神奈川県北西部、東京都、さらに100km以上離れた房総半島にまで降り注いだ。地球科学の研究者の間では前月4日に発生した宝永東海・南海地震との関連性が指摘されている。

噴火の様子は火口から約100km離れた江戸でも確認された。噴火開始直後、富士山上空に青黒い山のような噴煙が確認されるとともに、爆発にともなう空振で江戸の町中でも戸や障子が強く振動した記録が残っている。江戸は午後1時頃から噴煙に覆われて暗くなり、灰色の火山灰が降り出した。夜になって火山灰は黒色の砂へと変わり、夜半に降り止んだ。

火口近くに集落がなかったことなどのいくつかの要因から、噴火による死者の記録は残っていないが、推定1.7km³の噴出物は家屋の倒壊や農耕地の耕作不能化をもたらし、流出火山灰が



火山灰(降下テフラ)の分布

堆積して酒匂川の氾濫などの二次災害を引き起こした。降灰が多かった地域の大部分は小田原藩で、翌年閏正月、幕府は被災村を直轄領へ編入し、小田原藩領だけでも5万6384石余・197ヵ村が上知されて関東郡代伊奈忠順の管轄下に入った。また幕府は救済資金として全国から国高役金48万両余を徴収した。

降灰除去作業は伊奈忠順の指揮の下、全郡をあげて田畑の復旧に取り組んだが容易に進まず、噴火から10年経た1716(享保元)年に復興のめどがついた駿東郡32ヵ村のみが小田原藩に復帰した。足柄郡諸村は1747(延享4)年と1783(天明3)年の2次にわたってようやく復領している。

1708(宝永5)年6月には、大雨によって大量の火山灰が酒匂川に流入し、足柄平野の入口に設けられていた堤が決壊して下流右岸の村が土砂で埋まった。1711(正徳元)年7月の大雨で再び決壊した際、酒匂川は足柄平野西部を流れ下り、流路はそのまま放置された。15年後の1725(享保11)年、関東地方御用も兼務した町奉行大岡忠相の命を受けた田中丘隅の手により、ようやく本格的な治水工事が始まった。

ところで、この問3の解答で、阪神淡路大震災や東日本大震災を答えるのは、設問の趣旨から不適切である。と言うのは、歴史上の出来事、というには最近過ぎるからである。まして、東日本大震災についてはまだ復興の道半ばであり、福島原子力発電所の問題に至っては解決の目処すら立っていないのが現状である。

3. 演習問題の例

以下にあげるのは、実際に出題された大学入試問題を練習問題として採り上げたものである。やはり、ここでは問題文に注目していただきたい。

1 次の文章を読み、以下の各設問に答えなさい。

ユーラシア大陸の東縁に位置する弧状列島日本では、人々は、幾多の地震や火山噴火と向き合いながら、社会を形成し、日々の営みを送ってきた。

1783年には、A□□・信濃国境の浅間山が噴火し、1,000人を超える死者を出した。この噴火は、数年前から始まっていた冷害によるB□□を深刻化させ、各地で百姓一揆や打ちこわしが続発した。

アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀沖に現れた1853年には、小田原地方を中心とする地域で、マグニチュード7と推定される嘉永小田原地震が発生した。小田原城では、天守閣が大破した。小田原藩内では、800軒以上の百姓家が全潰し、半潰は1,400軒にのぼった。C翌年には、安政東海地震、安政南海地震という巨大地震が続発した。これら二つの地震は、開国問題で揺れる日本社会に大きな被害と動揺を与えた。

嘉永小田原地震に始まる関東地方の地震の活動期は、1923年の大正関東地震まで続いた。大正関東地震の際には、東京を中心に大きな被害が生じ、朝鮮人の虐殺などの社会的事件も起こった。第2次山本権兵衛内閣は、混乱を收拾しようとして、非常事態に際し軍隊に治安権限を与えるD□□□を発した。

大正関東地震ののち、関東地方は地震の静穏期に入った。1945年の敗戦後、復興からE高度経済成長期を通じて、首都圏へ人口は集中し、都市の発展には著しいものがあった。偶然にも、この時期は、関東地方の地震活動の静穏期に一致していた。首都圏は、大地震の襲来を忘却し、それへの備えを十分に施すことなく、繁栄を謳歌してきた。

1995年1月17日、兵庫県南部地震が起き、6,000人を超える死者が出た。この時、首相官邸

の情報収集機能がうまく働かず、初動体制に遅れをとり、F□□□□首相に対して強い批判が向けられた。兵庫県南部地震は、戦後の日本が地震に対して脆弱な都市を築いてきたことを暴露した。また、2,000年7月にはG□□□の雄山が噴火し、9月に全島民の避難がおこなわれた。地震や火山活動と正対して新たな社会システムを構築していくことが、今まさに求められている。

〔設問〕

- (1) 空欄Aの□□にあてはまる旧国名を答えなさい。ただし、□は漢字1文字に相当する。
- (2) 空欄Bの□□にあてはまる語を答えなさい。ただし、□は漢字1文字に相当する。
- (3) 下線部Cについて、安政東海地震のとき、ロシアの提督プチャーチンを乗せて□□に来ていたディアナ号が津波により大破した。□□にあてはまる地名を答えなさい。ただし、□は漢字1文字に相当する。
- (4) 空欄Dの□□□にあてはまる語を答えなさい。ただし、□は漢字1文字に相当する。
- (5) 下線部Eについて、日本は、特に1960年代後半には10%前後の実質経済成長率を記録し、1968年、日本の□□□は、資本主義世界では西ヨーロッパ諸国を抜き、アメリカに次いで第2位となった。□□□にあてはまる語を答えなさい。ただし、□は漢字1文字に相当する。
- (6) 空欄Fの□□□□にあてはまる人名を答えなさい。ただし、□は漢字1文字に相当する。
- (7) 空欄Gの□□□にあてはまる地名を答えなさい。ただし、□は漢字1文字に相当する。

2 次の文章を読み、〔 〕で適当と判断する語句を選び、その符号を答えなさい。

富士山は、その姿の美しさから日本人の多くに好まれるのみならず、現代では海外から訪れる人も少なくない。しかし富士山は、時代によって見方・捉え方が変化してきたように考えられる。

噴火をくり返した古代においては、例えば802(延暦21)年正月8日、富士山の噴火に対し、平安遷都を行ってまだ間もない(1)〔イ. 平城 ロ. 桓武 ハ. 嵯峨 ニ. 光仁〕天皇は、これを早魃や疫病の予兆と見て、駿河・相模両国に祈禱や読経を行い災いをはらうよう命じた。同年には、蝦夷勢力の制圧を行い胆沢城を築いて、それまでの(2)〔イ. 多賀城 ロ. 秋田城 ハ. 淳足柵 ニ. 出羽柵〕から鎮守府を胆沢城に移したように、北方での不安も存在する時期であった。802年の蝦夷制圧には、征夷大將軍となった(3)〔イ. 大野東人 ロ. 文室綿麻呂 ハ. 紀古佐美 ニ. 坂上田村麻呂〕らの活躍があった。

噴火は続き866(貞観6)年には、富士山の熔岩が本栖湖や河口湖に向かって流れ込み、「水が熱して湯の如くなり魚などは皆死んだ」と六国史のうち最後の正史である(4)〔イ. 『日本三代実録』 ロ. 『続日本後紀』 ハ. 『日本文徳天皇実録』 ニ. 『日本後紀』〕に記されている。富士山の噴火をいかに鎮めるかは、古代の人々にとっての重要関心事であり、木花開耶姫を神として祀る浅間神社に噴火を鎮めるための祈禱をさせた。

中世になると前代からの密教や修験道の盛行にともない、富士山は吉野・熊野や木曾御嶽など各地の霊山と同様に信仰の対象や修行の場となった。吉野・熊野には、聖護院を本山とする(5)〔イ. 律 ロ. 法相 ハ. 天台 ニ. 真言〕宗系修験者と醍醐寺三宝院を本山とする(6)〔イ. 律 ロ. 法相 ハ. 天台 ニ. 真言〕宗系修験者が山岳修行の場とし、最も勢力を持った。自分の意のままにならぬのは、鴨川の水と(7)〔イ. 春日山 ロ. 鞍馬山 ハ. 高野山 ニ. 比叡山〕の僧兵を指す山法師と、双六の賽の目の三つ(天下三不如意)しかないというほどに権勢を振るった(8)〔イ. 白河 ロ. 後白河 ハ. 鳥羽 ニ. 後鳥羽〕上皇は、しばしば熊野詣を行い、先達をつとめた三井寺増誉は熊野三山検校に任じられ、聖護院を与えられた。

鎌倉時代初期の東国武士社会に題材をとった軍記物語の(9)〔イ. 『義経記』 ロ. 『太平記』 ハ. 『梅松論』 ニ. 『曾我物語』〕は富士山裾野での巻狩りを舞台にした敵討ち物であった。富士山の頂上を目指すには、中世期には浅間神社本宮を経て村山口の修験者が先達となって登拝した。「富士山参詣曼陀羅」(浅間神社本宮所蔵)には富士登山の様子が子細に描かれている。

戦国期になると富士山麓の地域は甲斐・駿河両国にまたがり、今川・武田・北条三大名の戦闘の舞台になった。今川・武田氏は守護大名出身であったが、北条氏は初代の早雲が京都から下ってきて(10)〔イ. 古河公方 ロ. 堀越公方 ハ. 鎌倉公方 ニ. 関東管領〕足利政知の死後、跡を継いだ足利茶々丸を滅ぼして伊豆を奪い、相模に進出して小田原城を本拠としたものであった。1590(天正18)年、豊臣秀吉による小田原攻めによって最後の当主の父である北条(11)〔イ. 氏政 ロ. 氏直 ハ. 氏綱 ニ. 氏康〕が自刃して敗北し、関東は徳川家康の支配する土地となった。

もともと駿河国も拠点としていた徳川家康は、富士郡にある富士浅間神社本宮の社殿造営の費用を出し、1606年に遷宮式が行われた。この前年に息子秀忠に征夷大將軍を譲り、1607年には(12)〔イ. 伏見 ロ. 名古屋 ハ. 浜松 ニ. 駿府〕に居城して、大御所としてなお政務を統轄した時期に当たる。

戦乱が収まると、富士山参詣者は村山口に加えて、吉田・川口・須走各村の御師を介して富士山頂内院(噴火口)を目指した。御師は、格式のある大きな神社(富士山周辺では浅間神社)などの近くに付属するように居住し、参詣者の祈禱や宿泊の世話をしたり、各地の参詣者(檀那)を巡って守札を配ることもした。中世期から活動が目立つのは、天照大神を祭神とする神社である(13)〔イ. 熊野 ロ. 住吉 ハ. 伊勢 ニ. 日光〕の御師などだが、その他多くの神社の御師の活動が知られている。

1707(宝永4)年11月、富士山は大爆発を起こした。御師の集落では須走村の被害が甚大であった。噴石による焼失家屋は37戸、3m近い降砂で家屋36戸と3寺院が潰れ、浅間神社も大破して村は潰滅状態となった。幕府は被災地を検分し、翌年早々に小田原藩領を幕領に改めて対応に当たった。復旧のための普請奉行には(14)〔イ. 山田奉行 ロ. 関東郡代 ハ. 美濃郡代 ニ. 飛騨高山郡代〕を世襲した伊奈半左衛門が当たった。まず伊奈半左衛門は、酒匂川などの河川に埋もれた降砂の川浚普請を、町人請負いにして、必要経費を見積らせ、幕府は岡山藩(15)〔イ. 浅野 ロ. 藤堂 ハ. 加藤 ニ. 池田〕氏や小倉藩小笠原氏など五大名に手伝普請として負担させた。

もう一つの復旧策として、幕府は全国に諸国高役金を掛け、石高 100 石について 2 両ずつの割合で復興金を集めた。上納された合計金額約 49 万両は、(16)〔イ. 2450 万 ロ. 245 万 ハ. 24 万 5000 ニ. 2 万 4500〕石から集められたことになり、被災地や寺社領を除く全国の石高に相当する。このうちから、須走村には金 1811 両が救金として渡され、再建費用にあてられた。このほか金 6 万 3000 両余が復興のために支出されたが、残りの金 40 数万両は、時の勘定奉行 (17)〔イ. 柳沢吉保 ロ. 新井白石 ハ. 荻原重秀 ニ. 田沼意次〕らによって他に流用された可能性が残される。砂埋れの田畑の復旧作業には時間がかかり、近世後期になっても苦しい地域が残された。酒匂川流域農村(小田原藩領)で生まれ育った (18)〔イ. 二宮金次郎 ロ. 大原幽学 ハ. 大蔵永常 ニ. 佐藤信淵〕は困窮した村々に報徳仕法をもって再興のために協力した。

吉田口からの参詣者を中心に、江戸後期には富士講が盛んになる。^{じきぎようみ ろく}食行 身禄が富士山中で断食行の後に入定したことから、身禄の口述した教説とともに信仰が広がり、江戸市中とその周辺に拡大していった。単に遊山を求める参詣から新たに信仰を求めていったのである。この信仰集団である富士講は、明治維新後は扶桑教となり、(19)〔イ. 井上正鉄 ロ. 黒住宗忠 ハ. 川手文治郎 ニ. 中山みき〕が創始した天理教などとともに教派神道の一つとして公認されることになった。

現代において富士山麓の多くは観光開発されて多くの人びとが訪れるが、忘れてはならないのは東富士・北富士に自衛隊や米軍の演習場などが設置されていることである。北富士演習場は、もともと山梨県南都留郡忍野村忍草の採草をする入会地であったが、1955 年、その使用权を求めた村民女性たちの反対闘争が起きた。これは、東京都立川米軍基地反対の (20)〔イ. 内灘 ロ. 昭島 ハ. 砂川 ニ. 三鷹〕での反対運動などとともに、この当時の基地反対闘争の中で注目された。

現在、富士山を抱く静岡・山梨両県では、ユネスコの世界遺産に富士山を登録されるよう準備を進めている。

’11 学習院 法

4. 自作問題の例

次に紹介する問題は、大学入試で出題されたものではなく、自作の問題である。あくまでも日本史の問題である以上、設問は日本史の問題としての視点から設定しているが、本文自体は、簡単な災害史の解説にもなるような文章にしてある。

- 1 日本は自然災害が多い国である。それは中緯度の大陸東端に位置する弧状列島という地理的条件に由来するところが大きい。以下の各文章は、歴史上の災害や防災について述べたものである。これらの文章に関する各設問(1)～(30)に答えなさい。
(問題文及び設問の一部を抜粋)

B. 葛野郡の中心である嵯峨野は、(c) 5 世紀の後半に葛野地方に定住した秦氏によって本格的に開かれた。淀川水系を遡ってこの地にたどり着いた秦氏は、弥生時代から定住していた勢力との対立を避けつつ、大陸から持ち込んだ土木技術によってこの地を開発していったと考えられる。

彼らが地域の有力集団となれたのは、(d) 桂川(嵐山付近では大堰川と呼ばれ、古くは葛野川と呼ばれた)の氾濫を抑え、灌漑用水として利用することができたからである。特に古墳時代後期までに完成したと考えられる葛野大堰は、現在の嵐山・渡月橋付近に築造された貯水ダムで、水をせき止める一方、流れと別の水路を作って水を流すことで水量を調節し、洪水を防ぐと同時に農業用水を確保した。

『養老令』雑令では、水路や堰の修築は「用水の家」つまり民間で行うものとされていた。しかし『養老令』の私的注釈書である『(イ)』で引用されている『大宝令』の注釈書である『古記』では、民間では修理できない大規模な施設として「葛野川堰」をあげている。

桂川の治水によって山城盆地最大の政治勢力に成長した秦氏は、9 世紀中～10 世紀に書とされた『史記』・(e)『漢書』・(f)『後漢書』が秦の横暴を批判し、漢の建国を正当化し

ているのに、あえて秦氏が始皇帝に連なるとしたのは、古代中国の卓越した土木・治水技術を受け継ぎ、防災と開発を推進してきたことに誇りを持っていたからかもしれない。現在の太秦・嵯峨野地区の歴史的景観は秦氏が築き上げた「防災文化」と言っても過言ではないだろう。

(5) 下線(c)について、秦氏の祖とされる渡来人を、次の1～4から選べ。

1. 弓月君 2. 阿知使主 3. 東漢氏 4. 西文氏

(6) 雄略朝の秦造酒公^{さかのきみ}以後、645年の大化改新までの約150年間に、史書に名を残している秦氏は、欽明朝の秦大津父、推古朝の(1)秦河勝、(2)『上宮聖徳法王帝説』にひく天寿国繡帳作成に関与した秦久麻だけである。このことについて、次の間に答えよ。

- ① 下線(1)が太秦に建てた寺について述べた文として、誤っているものを次の1～4から選べ。
1. 寺の名を広隆寺という。
 2. この寺の本尊は北魏様式で作られた弥勒菩薩像である。
 3. 国宝第一号となったこの寺の本尊は弥勒菩薩像である。
 4. この寺の本尊は右膝を左足に載せ、右手を頬にあてて思索にふける半跏思惟像である。

② 下線(2)について述べている文として誤っているものを次の1～4から選べ。

1. この書は厩戸皇子の伝記である。
2. この書は現存する聖徳太子の伝記としては最古のものである。
3. この書によれば、わが国に儒教が伝わったのは538年のことであり、この説を壬申説という。
4. この書によれば、わが国に仏教が伝わったのは538年のことであり、この説を戊午説という。

(7) 下線(d)を江戸時代に河川航路として開発した、朱印船貿易でも知られる豪商を次の1～4から選べ。

1. 茶屋四郎次郎 2. 河村瑞賢 3. 末次平蔵 4. 角倉了以

(8) (イ)に入る書名を答えよ。なお、この書は秦氏の一族である惟宗氏の惟宗直本が編纂した。

(9) 下線(e)について、『漢書』に収められている地理志は、日本に関する最古の文献史料である。これにはいつ頃の日本のことが記されているか。次の1～4から選べ。

1. 紀元前1世紀 2. 1世紀 3. 3世紀 4. 4世紀

(10) 下線(f)について、『後漢書』の東夷伝には、日本に関する記述として次の文がある。

「安帝の永初元年、倭国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う。桓靈の間、(), 更々相攻伐し、歴年主無し」

()にあてはまる一文として正しいものを次の1～4から選べ。

1. 倭国騷擾 2. 倭国大乱 3. 奴国分裂 4. 奴国混乱

C. 平安時代の天仁元(1108)年に (g) 浅間山が大噴火を起こし、上野国のほぼ全域が大量の火山灰で覆われるという激甚災害が発生した。

浅間山は群馬県と長野県の県境にあるが、古代では信濃国に属していたと思われる。と言うのも、古代の官道であるウの駅路をたどってみると、京からやってきた通行者は、浅間山を左に見ながら(エ)峠を越えて上野国に入る。浅間山が信濃国の歌枕であることから推測できる。しかし、現在の群馬県民は、浅間山は群馬県の山であると考えているようだ。(h)『中右記』には天仁元年の噴火についての記録が記されているが、「上野国の国中に高山あり麻間峯と称す」とあるから、当時も上野国の人々は浅間山を自国の山と見ていたのだろう。

ところで、このような大災害がもたらされると、これは天皇の不徳の致す所と考えるのが、

古代・中世の一般的な考え方であった。そのため君臣をあげて神仏に災異消伏を祈願し、災異を神霊による祟りと考えることによって政治批判をかわした。これが鎮護国家思想の根本的な考え方である。

平安中期から南北朝期に出されていた（オ）と呼ばれる法令も、天変・地震・飢饉・疫病などを天皇の徳の衰微と考えて出された一種の徳政であり、（オ）を発して仏神事を行うことにより、神仏の力をもってして災厄を鎮めようとしたのである。

- (11) （ウ）にあてはまる官道を次の1～4から選べ。
1. 東海道 2. 東山道 3. 北陸道 4. 東北道
- (12) （エ）にあてはまる峠は、江戸時代においても中山道の要衝として関所が置かれ、厳しく通行が改められた。この峠の名を次の1～4から選べ。
1. 箱根 2. 逢坂 3. 碓氷 4. 小仏
- (13) 下線部gについて、江戸時代、天明3年にも浅間山は大噴火を起こし、周辺地域に大きな被害をもたらした。この災害は、当時の政治に対する不満から、神罰と捉える見方も多かった。この頃の政治を風刺した狂歌として適切なものを次の1～4から選べ。
1. 白河の岸打波に引換て浜松風の音の烈しさ
2. 白河の清き流れに魚すまずにごる田沼の水ぞ恋しき
3. 上げ米といへ上米は気に入らず金納ならばしじうくろふぞ
4. 年号は安く永しと変はれども諸色高値いまにめいわ九
- (14) 下線部hについて、『中右記』の筆者、藤原宗忠は摂関政治から院政に移行した12世紀後半に右大臣などを歴任した公卿である。この頃の天皇を即位した順に記したものを次の1～6から選べ。
1. 鳥羽 — 白河 — 後三条 — 堀河 — 崇徳 — 後白河 — 高倉
2. 鳥羽 — 白河 — 堀河 — 高倉 — 崇徳 — 後三条 — 鳥羽
3. 後三条 — 白河 — 堀河 — 鳥羽 — 崇徳 — 後白河 — 高倉
4. 後三条 — 堀河 — 白河 — 鳥羽 — 高倉 — 後白河 — 崇徳
5. 後白河 — 高倉 — 堀河 — 崇徳 — 白河 — 後三条 — 鳥羽
6. 後白河 — 高倉 — 後三条 — 鳥羽 — 堀河 — 白河 — 崇徳
- (15) （オ）にあてはまる法令を次の1～4から選べ。
1. 袖判下文 2. 公驗 3. 沙汰未練書 4. 新制

4. 結びとして

実際に出题されている日本史の入試問題を見ていただいたが、このような地学的な事柄に触れた問題文は、当然であるがレアケースである。だが、実際の出題例のみを用いることはなく、自作すれば地学的な教養も周辺知識として用いることができる日本史の問題もあるのだということを示した。

ここで提案したいのは、繰り返しになるが、受験日本史の授業という、一見地学とも防災教育とも関係のなさそうな授業の中で、防災教育ができないか、ということである。実際の災害が起きた場合、高校生というのは貴重な戦力になり得る。救助、負傷者への応急手当から、避難困難者への支援や避難誘導、さらには避難所の運営などに積極的に関わってほしい存在である。そのためには系統だった防災教育がなされるのが望ましいが、その時間も手間も惜しむというのが、高校の教育現場の実態である。それならば、通常の授業の中に防災教育を織り込んでみてはどうか、というのが提案である。

では具体的に、どのような防災教育ができると考え、また実際に私が実践しているかを披露したい。

今までに例示した問題は、設問の内容は純粋に日本史の問題であるが、問題文自体は災害史の文章と言っていい。そこで、その問題文に採り上げられている災害が、実際に今起きたら、

ということを生徒に問いかけてみる。そのタイミングは採り上げた文章そのものや、授業展開の状況に応じて臨機応変にやればいいと思っている。

例えば、富士山の噴火に関する文章の場合、問題文中になくとも当時の被害状況のあらましを講じる（勤務校が東京都にあるので特に当時の江戸の被害状況について講じている。富士山の噴火によって被害を受ける地域でなければ、被害状況の話は近くにある火山について話せばよい）。次に、同様の被害を今受けた場合、どのような状況になるかを考えさせる。ほとんどの生徒は火山灰が降り積もることのみに目を向けるが、火山灰が降り積もることによる都市機能への影響について考えさせる。変電所や電柱の変圧器内に火山灰が入ったらどうなるか、通信用アンテナに火山灰が付着したらどうなるか、などの質問をして、その影響を考えさせる。そして、では富士山の噴火に備えてどのような物を準備しておいたらいいかを考えさせる。地震や台風への備えと同じでいいのか、特に火山噴火の場合に必要なと思われる物はないか、ということについての生徒の意見を聞いたり生徒同士で議論させる。また、火山の噴火の形態や噴出物、マグマと火砕流の違いなど、火山学の初歩的な知識を教えるのもいい。授業時間の半分（私の場合、たいてい1コマ分）位の時間を使ってしまいが、それは仕方ない。地震に関する問題文を使った場合は地震について、風水害に関する問題文なら風水害に関して、いろいろと応用はできる。

ここで当然出てくる異論は、地学的知識や防災の知識がない教員には無理だ、ということだろう。この異論は、自らそのような知識を学び授業に活かそうとしないという点で、基本的なところを間違えているが、当然の異論でもある。そこで、以下の提言をしたい。

まず、教職課程に防災教育という課目を作り、防災知識から地学的な教養まで、一通りのことを学ばせるようにしてはどうか。個々の教員の独自の努力や勉強は重要だが、実際に現場に出れば、また経験の浅い教員ほど、授業準備や校務で手一杯になってしまい、そのような時間を持っていないというのは指摘されなくてもわかっている。現職の教員はともかく、これから教員になろうとする者に対しては大学で学べるようにしておけばよいと思う。

次に、大学入試の問題を質的に変えるという議論が形になりつつあるが、大学入試の問題自体に防災教育や地学的な教養を求める問題を出題するように、大学側に働きかけてみてはどうか。「授業の中での防災教育を」と主張すると、「入試には出ない」という反論が返ってくるのは目に見えている。ならば、入学試験問題の中に織り込んでもらえば、否応なく受験指導の現場では教えざるを得ないだろう。大学入試改革の一つとして、複数科目にまたがる問題を出す、ということが論議されている。そのような問題ならば私が主張する出題も出しやすいと思われる。例えば、地震に関する古記録と現代の文章（新聞記事でもドキュメンタリーレポートでもよい）を問題文として出す。この文章に即した問題を作れば現代文と古文の出題ができる。次に古記録の時代についての知識を問えば日本史の出題ができる。同時代の世界史の問題も出せる。地震波に関する問題を出せば地学の他に物理の出題もできる。マグニチュードの計算問題を出せば数学の問題もできる。政府や自治体の災害対応の話に持っていけば政治経済の出題もできる。避難所運営や被災者救助について、家庭科や保健の出題ができる。地震帯と火山帯と造山帯が一致するという話に持っていけば地理の出題ができ、火山からマグマの結晶分化の話に持っていければ化学の問題もできる。具体的な問題例を例示するにはスペースがなさ過ぎるのでできないが、そのような問題を作ってみると言われれば作れる自信はある。

以上の提言は、大規模な制度改革を含むものであるからそう簡単に実現するわけがない、というのはわかっている。だからこそ個々の教員が防災教育の重要性を認識し、まず自分の授業内で防災教育を施していく姿勢を持つことが重要だと考える。通常の授業の中で、とりわけ大学入試に対応した授業の中で防災教育なんかできるわけがない、と考える方々に対して、そんなことはない、という実践例を紹介することで、高等学校、特に私学の高等学校でも、もっと積極的に防災教育に取り組んでいただけることを願っている。